

令和6年度 第2回 函館市（仮称）総合ミュージアムの整備にあたっての基本的な考え方 （たたき台）への意見に関する検討会議 会議録	
開催日時	令和6年7月30日（火）18時30分～20時10分
開催場所	函館市企業局4階大会議室
次第	1 開 会 2 挨拶 3 議 題 （1） 函館市（仮称）総合ミュージアムの整備にあたっての基本的な考え方（たたき台）に対する意見について 4 その他 5 閉 会
出席委員	（出席委員 19名） 川嶋委員，若山委員，田原委員，黒島委員，小山委員，酒井委員，駒野委員，坂野委員，高間委員，田上委員，根本委員，村上委員，中村委員，佐竹委員，佐藤（安）委員，渡邊委員，山田委員，谷口委員，林原委員 （欠席委員：7名） 奥平委員，鈴木委員，佐藤（秀）委員，木村委員，池田委員，北山委員，太田委員
庶務 （事務局）	函館市教育委員会生涯学習部 土生部長，宮田部次長， 加藤歴史文化資源保存活用担当課長，熊谷博物館長， 長濱生涯学習文化課長，木村文化財課長 歴史文化資源保存活用担当 橋本主査 市立函館博物館 三浦主査，大矢主査
その他	報道関係者：1名 傍聴者：3名

1 開 会

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

それでは定刻となりましたので、ただいまより令和6年度第2回函館市（仮称）総合ミュージアムの整備にあたっての基本的な考え方（たたき台）への意見に関する検討会議を開催いたします。

なお、本会議の議事録を作成いたしますので、録音いたしますことをご了承願います。配付資料の確認をさせていただきます。

「検討会議 次第」でございます。続きまして「座席表」でございます。

そして、委員の皆様には毎回ご持参をお願いしております4種類の資料についても本日お持ちでない方がいらっしゃいましたら、こちらの方にお声がけいただければ、ご用意いたしますので。大丈夫でしょうか。

2 挨拶

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

それでは進めてまいりたいと思います。開会にあたりまして、本検討会議の座長でございます公立はこだて未来大学 特命教授 川嶋稔夫様よりご挨拶を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

【川嶋座長】

どうも、こんばんは。こんばんはと言うにはちょっと明るいですが、例年にも増して、暑い夏になりそうな予感があって、皆さん大変なところの中、お集まりいただき、大変恐縮しております。

この会議ではですね、(仮称)総合ミュージアムのあり方に関する皆様からの意見、これが市民のコンセンサスという形を作れるようであれば、それに基づいて、函館市の教育委員会の方でたたき台について必要な修正をしていただくような、そういう形になって進んできました。ですので、今日は、前2回がですね、皆様からのたくさんの意見をいただきました。その中には本当に幅広い分野の、前2回の会議の中では、皆様から本当にたくさんの意見をいただきまして、いろいろな視点からの意見が出て、この検討会議が進んでいく中で、だんだん皆様の見ている方向が、共通点が見出せてきているように思います。そういうことですので、今日は前回予告いたしましたように、前半の部分ですね、統合なのか、集約なのか、その中間あたりの形なのかというところについて、この会議の中でのコンセンサスを図っていききたいというふうに思います。

後半の方では、さらに今日持ってきてくださいと言われている基本的な考え方のたたき台がありますけれども、皆様の議論を反映して、このたたき台について検討をしていきたい。このたたき台を我々が作成するものではなくて、我々が検討会議の中で出した意見に基づいて修正が行われるということですので、忘れず、今日の会議の中で必要な要望ですとか、あり方に対する考え方を皆さんの方で発言していただけるとありがたく思っています。

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

川嶋座長、どうもありがとうございました。

それでは、本日の委員の皆様の出欠状況についてご報告申し上げます。本日ご出席いただきました委員の方々は、26名中20名のご出席を確認させていただいております、今2名の方が到着遅れてございます。その状況であったとしても、過半数を超えておりますので、当会議設置要綱の規定による委員の過半数の出席を満たしておりますので、本会議が成立しておりますことをご報告させていただきます。

本日、協議・検討をいただきます議題につきましては、先ほど座長の方からもお話がありましたけれども、前回の会議より継続協議とされました意見に対する検討でございます。本日第2回の会議では前半にて「集約あるいは分散の具体的な形態についてのとりまとめ」より協議をスタートすると総括されたところでございます。本日の会議は、総論に係る具体的なとりまとめへとフェーズが進められるものと考えてございます。

今回も引き続き委員の皆様より、統合、集約あるいは分散の具体的な形態についてのご意見をはじめ、多様な意見を頂戴したいと考えておりますので、総合ミュージアムの整備にあたっての基本的な考え方（たたき台）の成案化に資する市民コンセンサスが図られる関連なご議論とご意見についてよろしくお願いいたします。

それでは、川嶋座長、議事進行のほどよろしくお願いいたします。

3 議 題 (1) 函館市(仮称)総合ミュージアムの整備にあたっての基本的な考え方(たたき台) に対する意見について

【川嶋座長】

はい。まず、最初にですね、ごく簡単に前回までの振り返りをしていきたいと思えます。これまで施設の視察、視察後に意見交換をし、博物館環境のあり方についての意見をいただきました。前回はですね、函館における博物館、資料館の状況を踏まえた5館のあり方に関する意見を交換した訳です。5館のあり方ということは、具体的には統合がいいのか、分散のままがいいのか、あるいは一部統合という考え方について意見を交換しました。それらの中で分かってきたことはですね、統合は一部あるいは全部が、ということについては、まだこれから考えるにしても、統合は必要である、これは前回の議事録、この前の議事録を眺めていきますと皆様の意見はそういうところであって、現状維持で分散したものという意見はありませんでした。

積極的な意見としては、例えば生徒さん達が学習するような場合においても、あるいは観光においても、総合ミュージアムという多様な物が1か所に集中しているというのはプラスに働くであろうというような意見がありました。

それから、次が資料の保全に関わることです。皆様からたくさんいただいた意見の中には、津波等の対策、文化財を保護していくために津波等の影響が出てくるような場所に文化財を収蔵しておくことについては、やはり懸念を感じるということ、それから、温度湿度管理の問題も出てきました。それから、さらにはですね、収蔵スペースが狭くなっている、あるいは分散しているということに対する意見もありました。こういう資料を保全していくということが、かなり重要な課題であって、出ていた意見の中には、それは総合ミュージアムとして、総合ミュージアムを仮に造るとして、その建物を造るよりも何よりもあまり時間をおいてやるべき、時間をおくべきではない、急いで行うべきであるというような意見も出ておりました。

それから3番目ですね、方向性としては、主として市民が積極的に利用できるようなミュージアムにするべきではないかという意見があったように思います。もちろん観光ですとか、インバウンドとかという話もありましたけども、やはり目に付いたのは市民が積極的に利用するミュージアム、恐らく観光等ではですね、現状でも一部分入っているところはありますけども、その市民が積極的にという点では、この5館全体を見て、なかなかその利用の機会が今は少ないのかなというふうに思いました。そういう中ではですね、課題学習等に使いやすいミュージアム、地域のことを学べるとか、あるいは学習のスタート地点、起点として使えるようなところすとか、あるいはスペースの問題

です。このスペースというものの中には、ある種の、勉強だけではなくて、リラックスするようなことができるスペースも含めて検討することができないのかというようなことがあり、さらには、それらと街歩きが連携できればいいというふうな話が出ておりました。

あと、他にもこれは博物館そのものの話ではないですけども、西部地区の将来像についてと、このミュージアムとはどういうふうに関わってくるのか、あるいはもちろん財政面のことも非常に気になるという意見が出ておりました。

というようなところが、今までの意見を私なりに皆さんの発言を記録して出た印象というところです。

で、今日の進め方ですけども、まず、今日、総合ミュージアムにあたっての統合あるいは分散ということの方向性については、まとめたと思います。ただし、先ほど出てきた優先課題としての資料保全に関すること、津波に対する対応だとかというのは、この統合するですとか、新しい場所を確保していくとかということだけに囚われていては、非常に優先課題として、重要な資料の保全という面では課題が残るので、こちらについても今日の議論の前提として取り上げていきたいというふうに思います。

それが多分、前半の時間帯くらいで終わることができましたら、それらの議論、あるいは前回までの議論に基づいて、このたたき台に書かれている内容について、見直していきたいというふうに思います。これは先ほどお話しましたけども、この検討会議が、このたたき台の文章を直接作る訳ではなくて、これに対する意見を述べて、それに基づいて函館市の方で文章の修正を検討していくという形をとります。

恐らく、いくつも意見が出てくると思いますので、そこについては、今回、たくさん積極的に意見を出していただくのがいいだろうと思います。今日はそういう日程で進めたいと思います。

さて、そういうことなのですが、皆様どなたかに口火を切っていただきたいですけども、統合の方向性に関するご意見をお持ちの方、まず何人かに伺いたいと思うのですが。中村先生、よろしいでしょうか。

【中村委員】

こんばんは。文化財保護審議会、前回ちょっとお休みしたのですが、その時には、一応意見を短く書いて読んでいただけたかなと思いますけども、私が申し上げたのは、1つは函館の博物館の状況を全道的な状況と比較すると、大体どの市も総合館があって、後は何かテーマに分かれたものが1つある、美術館は別にあるというくらいの状態で、函館のその状況というのは非常に潤沢だとか、お金をかけて手当してあるという状況だと言えらると思います。それは前に田原委員がちょっと仰いましたけども、街なか博物館みたいな効果、小さな館を置いて、そこを巡ってもらいながら学びも実現するみたいなことで、函館の場合、特に五稜郭があるので、昔、五稜郭分館もありましたから、本館と五稜郭分館の間で、ある程度移動があるものですから、そういう動線の中に学びを実現していくというようなものがあって、これは私、出身が函館ではないですけども、北海道の他の町の方達が非常に素晴らしい考えだと、本州の方なんかでもそういうふう

にテーマごとにわざと置いて、動いてもらう中で街も見てもらい、学んでもらうしというそういう方向なんだというのが大体80年代とか、90年代とかくらいにかなり進められたんですね。そういうことでもう1回言いますと、函館というのは北海道の、市町村の中で言うと非常に特異な状況に今なっている。そもそも政令指定都市の札幌って、これ有名な話ですけども、博物館持っていませんから。道立博物館が札幌市にあるというだけで、市立の博物館はないという状態になっています。その状態を踏まえて、今後、どうして行こうかということで申し上げたのは、ちょっと今の若い人達の人口、今後の人口動態などを考えると、今のように分散で置いていくというのは、経済的にもやはり無理なんじゃないだろうか、統合の方に向かうべきじゃないか、今の函館の状況はとてものいいけども、これを次の世代まで引き継ぐのは、正直なかなか難しいかなと。それと、総合館の他にテーマ館が1館ある、例えば網走なんかだったら、博物館があつて、モヨロ貝塚館があるとか、ああいうような状態のものを見ていても、まあ、できなくはないということですね。他の市町村、大体そういうふうに1館プラス必要がある場合は、非常にテーマ的なものを分館的において、せいぜい2館、あと、美術館は別ですけども、ある町は持っていますけども、そういう方向に行かざるを得ないのではないのかなと考えまして、この間申し上げました。本州の方なんかでもやっぱり造って大体40年くらい経って、建物は保っているけども、人間が置けない、専門の学芸職員が置けなくて、結局、本館の学芸職員が2館、3館見ているということが常態で、函館もそうになっていくかなと思いました。ちょっと繰り返しが多くて申し訳なかったですけども、以上です。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。基本的には統合の方向性で、多くて1館プラステーマ館、1館というのは総合的なものを1館プラステーマ館というようなことですね。

他の委員にも伺いたいのですが、どなたか。はい、田原委員、お願いします。

【田原委員】

田原でございます。ただいまの中村先生の考えは私も最もだと思うのですが、ただ、一番メインというか資料の保存という、ベースがそこにあつて、それをどういうふうに解決するかというのが1つ一番大きなポイントになると思う。だから、資料によっては、ジャンルによってはあるものと、全くないものと、そのへんの取り扱いをトータルの館の中で全部を一括で持ってきた方がいいのか、もしくはテーマ館みたいな特殊なやり方というのかな、北方民族資料館、あれも、もともと博物館の本館でやっていたものを移した、国指定の資料があつて、あと津波の問題というのも東北震災の関係で出てきたこともあります。だから、あれをあの場所にそのまま物を置いておくことは無理だと思う。そういう意味で統合というあり方は必要だと思う。ただ、テーマに関して資料の量と、それに実際的にそれが上手くいくかというのは、そここのところの考え方ですよ。それが一番大事なかなという、これをこういうふうにするという案まではいかないですけど、その部分だけ、ちょっと考えていけばと思っています。

【川嶋座長】

統合によって、ある程度できる量に制約が出てくる。

【田原委員】

例えば、考古資料というのは膨大にあるんですね。あり過ぎると。逆に言えば切り離してしまうと。徹底的に切り離した方がいいと思う。だから、むしろそれは博物館とはちょっと違うかもしれないけど、他でやっている埋文センターみたいのが理想だと思っていたんですけど、それもなかなか実際的にこれからまたそういうのを造るのは無理だと思います。だからそれを収蔵展示というやり方も、選択肢の1つとしてはそれがある。収蔵庫だけ残してしまうという手もあるし。統合するには展示館もというような方向性、それが言いたかったことです。

【川嶋座長】

ありがとうございます。多分、特にたたき台に対する意見として、そこに直接入れるかどうかというのがありますが、皆さんから具体的にこういうふうにしたらいいという意見をたくさん出していただいて、それをこれからの議論の中、教育委員会の側で使っていただくということなので、そちらの方については、意見をまとめていこうと思いますので、そういう具体的な話も重要だと思います。

あと、学校の立場からですね、高間委員、お願いできないでしょうか。街歩きとかそういうことで、いろいろ前回もご意見をいただいております。

【高間委員】

はい、小学校校長会です。小学生の立場から言いますと、何回もお話をしていますけれども、5館以外にも、西部地区中心に研修、自主研修等行っておりますので、5館が1つになることで、そこに行けば集中して見る物があって、そのほか公会堂や様々なところも歩くという意味では、街歩きの意味も、子どもたちにとっても逆にプラスになるのかなということで、それは構わないかなと。

後は、やはり雨の時のいろんな、5館ですので、リラックスできるスペースだとか、食事ができるスペースだとかというのは、また後の話にはなるとは思いますけれども、子ども達の学びということで言うと、5館集約されたということは、すごく使いやすいかなというふうに考えます。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。集約と小学校の教育というのも結びつけてプラスの方向に働いていこうという、そういう話だったかと思います。

小山委員、いかがでしょうか。街歩きとかそういう点でも、いろいろなご意見をお持ちだと思います。

【小山委員】

歴風会の小山です。私は前回、ある程度の集約は必要ではないか、けれども、残される館、その利用についても、きちんと考える必要があるのではないかという意見を述べさせていただきました。

統合した博物館、その博物館に今の5館全てを入れ込むというのは、私は難しいと思います。それは文化財的な資料であったり、多くの寄贈された資料、数が数字的にはきちんと分かってないし、どれだけバックヤード、収蔵庫が必要なのかというのもちょっ

と数字的には分からないですけども、感覚的には見せていただいた中では、難しいのではないかなというふうに思っております。

前回の皆さんのお話の中では、この博物館ができると、ある程度そこで函館のいろいろなことが分かるという、そういう博物館が今必要ではないですかというご意見がありました。

私、今あの函館検定を受けようかと思って勉強を始めたんですけども、そこを見ると、函館の概要、それから函館の歴史、そして自然・景観、人々の暮らし、文化・芸術・スポーツ、そして近隣の町との関係というふうに6つに分かれていて、その中身もものすごく濃いです。ですから、1館で函館の歴史から自然から暮らしから全てが分かるという博物館というのは、少し無理があるのかなとちょっと思っています。

先ほどの資料の観点から言うと、本当に第1種、第2種という言葉を使うのかどうか分からないけども、本当に文化財的な価値があって、これはしっかりと湿度管理、温度管理、日光が当たらない状態にするだとか、そういうことが必要な資料、あるいはこれはこの程度の保管で大丈夫な資料、大体どの場所でも展示していい資料というような形を少し分けていただいて、本当に大事な物については、新しい博物館に展示したり、収蔵するけれども、その後については、ある程度のテーマに沿って、例えば文学ですとか、芸術・スポーツ、そのあたりについては、もし空く場所があるのであれば、その場所にテーマ館として、新たに造ってもいいのではないかなというふうに思います。

なので、今の段階で私は、どの館とどの館は残した方がいいというのではなくて、全体を考えた中で入れるべき物と、テーマ館別に分けるものという、そういう整理の仕方も必要ではないかなというふうに考えております。以上です。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。

1つは収蔵量の点から、いろいろな懸念があるので、その点はどういうふうにするのだらうというのは、非常に大きな課題だらうと思います。

後は、統合なりをした後に出てくる建物の利用の仕方として、小山委員からはテーマ館で言うと、今のような展示とはちょっと違うことを想定されていますか？

【小山委員】

そうですね。文学館を文学館のまま残すとか、北方民族資料館をそのまま残すという意味ではなくて、それは新たな形でもいいのではないかなというふうに思います。

【川嶋座長】

文学を背景にしたような何か、ただ展示というのとはちょっと違うかもしれないですけど、そういう活動が行われるような、そういうところでしょうか。

【小山委員】

そうですね・・・。

【川嶋座長】

まあ、ちょっとそこはあんまり、これからですね。ありがとうございます。

今4人の方に伺いましたけども、他の委員からも手を挙げていただけるとありがたいですが。

【山田委員】

老人クラブ山田です。私、基本的にですね、いわゆるたたき台に出ているような形でいいと思っております。それを基本に私が考えたのは文学館、北方民族資料館、これはそのために建てた建物ではない訳ですよね。あくまでも前の銀行のところでやった。これはそういうふうにして建てられた、入っているものを集めて、なくして、1つの総合ミュージアムを造るべきだと。あと、本館につきましては、前から話がありますように、改造して温度湿度をきちっとした、いわゆる収蔵庫にするという、それは賛成です。ただ、トラックが入りにくいということがありますが、とにかくたたき台の考えているみたいなことでいいと思います。北洋資料館、これは北洋資料館として建てたものですから、そのまま続けていけばいいのではないかと。もう1つ北洋資料館については、弁天の方にも研究所がありますし、いろいろ考えることが出てくるだろうと思いますので、とりあえずそのまま続けたら。後は郷土資料館ですね、これは内容を若干変えて、博物館的な物はいわゆる総合ミュージアムの方に引き揚げて、あそこは観光客なり、ちょっとした休憩所、休憩点というふうな感じで残していけばいいのではないかとというような形で、まずは土台はやっていったらよろしいのではないかと思います。また、その他についてはそれぞれ話をする中で、発言をしていきたいと思っております。以上でございます。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。

具体的な館の名前が出てきましたけども、それぞれ違った考え方で統合を考えられていらっしゃる方もいると思いますので、そういう方からの意見を伺えればと思いますが。いかがでしょうか。ちょっと伺いたいのですが、佐竹委員いかがでしょうか。

【佐竹委員】

私、前回と今回で2回目ということになりますけど、前回の会議で終わりの方で太田委員が学際的な、いわゆるミュージアムが必要ではないかという話をされていたかと思っております。それを受けて、川嶋先生の方で、函館がいわゆる幕末を函館で迎えて、明治の開港があったという、このこともとても重要なポイントではないかという指摘をされたと思いますが、私も帰ってそのことを踏まえた時に、ミュージアムの構想というのは集約か統合かということからは、ちょっと外れるかもしれませんが、そういった学際的なミュージアムができれば、函館の歴史と文化を踏まえたとても価値のあるミュージアムができるのではないかなと感じています。特に、最初に川嶋先生の方から市民が積極的に活用できるミュージアムという話がありました。市民が活用できると言った時に、幅広い年代層があると思いますけど、やはりあの小学生、中学生、高校生そして大学生を踏まえた、今、函館で育っていて、函館の未来を担っていく子どもたちがそこに行くと、函館の歴史を俯瞰的に学べて、そのことでまたさらに探求的な学習も含めて深い学びができていくような、そんな魅力あるミュージアムができれば、私としてはとても本

当にうれしいなと思いますし、それが目指していく中で1つのコンセプトとしていただきたいなと強く思います。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。

今日の議論の中ではですね、学際的な総合ミュージアムとして統合する方が多分、というふうな方向性に進んでいくだろうと思いますけども、統合の中でも何館か統合が難しいかもしれないという話でした。

では、具体的にどの館については難しいのではないかということについて、確認して最終的にどういうふうな統合のイメージをもつかということについて進めていきたいのですが、どなたか口火を切っていただけませんか。若山委員お願いいたします。

【若山委員】

文学館と北方民族資料館は隣り合わせで、向いに郷土資料館ありますけども、あれは建物自体が文化的には価値があると、各期の函館の豪商時代のものがそのままになっているし、昭和9年の大火でも焼けていないので、あれは中身だけどこかを外して持っていくという訳にはいかないと思う。本来だったら札幌にあるような郷土の、函館からかなりものを移築していますけども、だからあれは絶対残してほしい。あれは建物自体の価値から残してほしい。

あと1つですね、総合ミュージアムが本当にでかくなった時に致命的な欠陥が1つだけあります。この間、横浜で2泊3日、午前・午後と連続して大学の会議があって、月曜日だけは夜9時10時まで開いていたんだけど、横浜市内の博物館全部休みで、月曜日が。

それで、唯一空いていたのは、これ凄かったですよ、人がね。アジア人どころか、アメリカ、ヨーロッパ人がどんと行ったカップヌードル博物館。これはカップヌードルをなぜ世界に発展したか、この起業家の歴史をずっと辿って行って、実際に世界のカップヌードルを試食させる、200円ちょっとで試食できるんですけど、その他に自分のカップヌードルを作ることができる、麺から作ってそれを揚げてというやつを、実際にすごいですよ、子どもたちだけじゃなくて、孫を連れた爺婆がワーストと行って、私と同じくらいの。月曜日はここに来るしかないんですよ、博物館全部休みですから。そこにいたじいちゃんも言っていましたけども。休みになって子どもたちというのほどこかに行きたい訳で、横浜の博物館、美術館も全部月曜日休みで、ここだけは年中無休なんだということを言っていました。ですから、意外と巨大な物をどんと造って、似たようなことになる、行くところがないということなので、これだけはちょっと今の博物館構想とはちょっとズレますけども、ぜひそういう空白ができないような形にできるように、ちょっとアイデアを付け加えてはかがかなと、そういうふうに思います。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。

多分それは結構、現実的には重要な要素かもしれませんね。どこの町に行ってもどこの国でも同じですけども、月曜日休みというところは非常に多くて、月曜日は海外でも

博物館休みだったりしますので、そういうようなところというのは、ちょっとがっかりしたところだと思いますので。

今のところですね、北洋資料館そのままですか、あるいは郷土資料館を残した方がいいのではないかと、建物という点で残すべきではないかということが1つ、他にご意見ありますでしょうか。

文学館のあり方についてもいろいろ出ていたと思いますが、ちょっとこのところも確認しておきたいと思います。渡邊委員いかがでしょうか。

【渡邊委員】

啄木会の渡邊です。この4館、5館を統合するということを考えた場合に、全部同じところにまとめるのは難しいのではないかと、テーマ的に。文学館などはどのように入るのかなと前から考えていたのですが、非常に難しそうだなと。また、文学館の中には、文学館の函館の文学のほかに、石川啄木という個人がまた入っているので、その展示も非常に難しいのではないかなと思います。それでこの間、1回言いましたけども、この啄木の実物資料は、図書館あたりに展示する場所があれば、そこに移した方がいいのではないかなというふうに個人的には考えているところです。他にもいろんな資料がありますので、それをどうするかということはこれから考えていくことかなと思っていますけども。

今、博物館の状態は、非常にひどいので、それをまず大きな物を建てて、統合させるということについては、その方向でいいと思っています。

【川嶋座長】

ありがとうございます。

文学館の位置付け、どういうふうに機能を残していくか、なかなか博物館として統合していくのには、なかなか難しさがあるし、前回の意見ですと、例えば図書館に持って行って展示すると言っても、なかなか光の関係で難しいところがあるというような、太陽光が当たるようなところがあるので、そのへんはちょっと解決の必要があるというような、そういうところですかね。

【渡邊委員】

一応、図書館に外光の入らないどこかを探すということです。

【川嶋座長】

今、集約か分散かという中で、例えばこの館については、どうだろうという意見はありますでしょうか。はい、根本委員お願いします。

【根本委員】

今の渡邊委員の後に話すのはすごくしづらいですけども、僕は全く真逆です。ここに遡上に乗っている範囲以外でも、旧イギリス領事館にある開港資料館とか、みんな僕は集約した方がいいなという意見です。

それはどういうことかという、大体3つの観点からそういう意見を持ったということですけど、1つは博物館がどうしても皆さんのイメージの中で、展示室というイコールに近い形がある。これから博物館を展示室イコールから脱却しなくてはいけないとい

うのは、まず1つ博物館学的に考えた時に大きな観点です。それは、1回見に行けばいいというのは一般的な人の考え方です。展示室だとかですね。でも、これからの博物館というのは、日常的に利用される博物館を目指さなくちゃいけないという、今の法律が変わって、そうじゃないと意味がないと思う。ですから、展示室という、分散して、すごく展示がたくさんあって見られるというのは、そのとおりだと思う。メリットです。でも、その考え方からやっぱり少し変えた博物館、次の博物館みたいなというのが1つ。

もう1つは、自分がやっている地域学の観点から見た時に、やはり皆さんにわかりやすく言うと、これまで病院に行くと、外科とか整形とか内科とか循環器科とかに分かれる。でも、今、すごく大事だなと言われているのは、なかなか病名が分からない総合内科、そういうトータルにみんなで見合っって話し合っって、病名を探すということがすごく大事になってくる。それと同じで函館の地域の中で、文学者の石川啄木という、そういう捉え方だけじゃなくて、何で近代、明治40年にあこがれて来たのかという、市民としてどう位置付けたいのかという、そういう、先ほどありましたけども、学際的な地域の捉え方をしていくのが、地域博物館の役割じゃないかなと思っています。ですから、民俗学とか、あるいはフォークロア民俗学だとかそういう分け方でいまままでやってきた。で、学問もそういうふうになってきた。でもこれからの地域というのは、そうやって地域学として、学際的なものの見方を作っていきましょう、それが僕はすごく楽しいと思う。石川啄木を、文学者の人が愛好家が行って、みんなすごくいいね、とそれで終わるのではなくて、全然文学に関係ない人が、こういう人がいるんだ、で、こういう人達が都市とどういふふうな関わりを持ったのかという、そういうふうなことの入り口になるのが、やっぱり博物館としてのこれからの地域の役割じゃないかなと。

最後に3つ目の観点というのは、やはりコスト面。やはりマネージメントを含めて、コスパが大事ですね。これからの地方の財政というのはすごくきつくなっていくのが予想されますので、その中でやはり現実的な観点というか、ですから、今、小山委員からもあったように、じゃあ今の博物館、利用されていたものをどのように活用するかというのは、もちろんそういう議論というのは同時進行でやっていかななくちゃいけないと思うんですけどもね、それも博物館と分断されるのではなくて、博物館と関係する利用の仕方っていくらでもあると思うんですよ。そういう議論が、今回はここでは出ていないですけども、そういう面で施設の集約化というのは、基本的に僕は大事な事かなと思っています。以上です。

【川嶋座長】

ちょっと、渡邊委員に伺いたいんですけども、今、啄木資料と他の文学館資料を分けて考えるという考え方も、前の中にはあったように思うのですが、そういう点で見た時に、例えば新しい総合ミュージアムができたとして、その中で文学に関する展示があつて、啄木資料は何かの形で必要に応じて展示するという、そういう形態もあり得ますか。

【渡邊委員】

そうですね、あの啄木の場合は、今まではですね、これからはまた別としても、常に展示する場合は持ち運びをしている。これは非常によろしくないということで、統合さ

せた博物館に置くのか、図書館にはコピー、資料とか、他の単行本とかいろいろな研究書とかもありますので、それをその時に原本は見ることはできないですけども、展示をしてあるのを見て、コピー、資料を閲覧して研究書を研究すると、というふうに総合的に使うことができるということで、啄木はそっちの方に置いた方がより、啄木資料は図書館で展示して研究するというのが1本でできるということを考えた方がいいかなというふうに思っています。

【川嶋座長】

原本は例えば図書館に行くけども、コピー等を使って、例えば文学館機能を総合ミュージアムの中に入れることはできるだろうと？

【渡邊委員】

ええっと、その逆で、原本を少数でも展示をして、そしてコピー、資料は図書館で閲覧、研究書も図書館で閲覧するということが1か所でできる、ということが大事なことかなと。

【川嶋座長】

とすると、文学館の石川啄木の部分に関しては、ですかね。

【渡邊委員】

啄木については・・・。

【川嶋座長】

啄木の部分に関しては、資料保護の観点から、図書館の中で展示するのが望ましいと。分かりました。

それ以外の文学館の部分については・・・。

【渡邊委員】

文学館については、総合的に中に1本出して展示をするなら、それならそれでいいと思いますけど、どの程度までできるのかなというふうには思います。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。

北洋資料館に関して、何か他に意見お持ち方いらっしゃらないでしょうか。

【中村委員】

統合の方でお話申し上げたので、その方向での話ですけど、北洋は五稜郭の方に複合施設みたいなホールがあって、そこに併地して造られ、私も何回も行きました、この間もですけど。で、統合を考えた時に思いますのは、新しく統合する館を造る、でも実際にホール中心に北洋資料館を造ってあるし、という形になっているので、これはこのまま置いておいてもいいのではないかという意見が出るのは当然だと思う。ただ、あのホールだって、もう造ってから30年とか近く経っているのではないかと思います。少なくとも20数年以上は経っている。やがてこの後、4年後、5年後に総合館ができた、で、総合館、新しい博物館が出来て。10年とか経つと、もう元の北洋資料館の施設の方が古くなるという話になる。ですから、私が申し上げたいのが、ある程度将来を見据えて統合できるものはそっちに統合する、今、無理に統合しなくてもいいけれども、そ

うというような形でちょっと余裕をもって造ってある館があって、今の五稜郭にあるホールが、また建て直しても同じような方向でいくというのだったら、それはそれで別に構わないと思いますけども、統合できるのであったら、そういうスペースを余分に造っておこうと、もし統合しないということであれば、それは資料でも何でも、博物館ってそもそも黙って置いておいても、物が集まる性質の施設なので、そういうようなことで、考えたらいいのではないか。今の状態で、北洋はいいから、今のまま置くというふうにしたら、それは30年後、40年後ずっとそれが足を引っ張るって話ではなくて、そこは少し緩く考えてはいかがかと思います。

【川嶋座長】

ちょっと、事務局に確認ですけど、芸術ホールは30年くらいじゃないかと言っていたんですけど、実際、北洋資料館の建物はどれくらい？建設後。

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

お答えいたします。整備、開設年月日が昭和57年の9月16日でございます。

【川嶋座長】

昭和57年、そこそこ経っていますね。

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

40数年経っていますね。

【川嶋座長】

すみません、私、函館に転勤してきた時に、非常に新しかったので、建ったばかりだと思ったものですから。

今の意見としては、とりあえず方向性だけ考えておいて、実際に統合するのは、タイミングを見ながらということですかね。はい、ありがとうございます。

ほかご意見ありますでしょうか。

多分、今のところ、統合か残すかというので、残した方がいいのではないかという意見が出てきているものとしては、郷土資料館の建物が重要だというような話と、それから北洋資料館については、結構小学生とかたくさん入っているので、あってもいいのではないかと、そういう話もありましたけど。

そんなところを整理できれば、全体としてのどこを統合していくような方向で考えるのが望ましいかというのは、コンセンサスが得られるかなと思うのですが。

ちょっと山田委員もう1度お願いできますか。北洋資料館について、意見仰られたと思いますけど。

【山田委員】

あれは函館商業高校を整理した時にですね、芸術ホールが先に出来て、それに引っ付いてできたものではない、逆ですよ。北洋資料館の必要があって、あそこに北洋資料館が建った訳だから、中のことについて言えば、いろいろ意見もあると思いますけど、とにかくそのために建てた博物館だということもあるし、函館自体が北洋資料館というのを大事にしていた訳ですし、今も大事にしている訳です。北洋漁業にまつわるからということだけではないと思いますけど、歴史的に大事にしてきた。そして、今まだドッ

クの向こうの広場に、何と言うのですか？ありますでしょ？水槽があつて。あれなんかドッキングできるところがあるのではないかと私は思います。だから、とりあえずは北洋資料館は総合ミュージアムの中に入れなくてもいいのかなと。いや、入れた方がいいというのであればどうぞ入れてやりましょう。

【川嶋座長】

酒井委員，いかがでしょうか。

【酒井委員】

もう1度たたき台，基本的な考え方というのを見直してみましたけど，これは教育委員会の方で作ったものですよ。それで，これをたたき台にしてということなのでしょうけども，大体この方向性というのは，5館統一して，効率よく造ってやっていきたいというようなことですよ，これね。基本的な方向としては，私もそれでいいと思いますね。先ほどからも意見出ておりますとおり，やはり，まずは効率的なコストの問題が，より大事だと思います。先ほど根本さんも仰いましたけども，これから自治体のそういう経営というのは，人口がどんどん減っていくにつれて厳しくなりますし，先日，根本さんからお話聞きましたけども，住民の調査で8割くらいの方がそういうものに懸念を示しているという，何か危惧していましたけど，やはり市民の方もあまりそういうところが利用されていないということを見ていて，ちょっと危機感を持っているというようなことが率直な感想としてあるのではないかと。ですから，そういう基本線を決めたうえで，先ほどから意見がいろいろ出ていますけど，このへんどうするんだというようなこと，問題というのがいろいろ出てくると思いますね。それは，やはり今までの考え方を引き摺って，やっていたら調整がとれない，思い切った観点を変えて，何というか，役に立つようなミュージアムですね，新しい時代にマッチしたような物を造っていくというようなことでやっていくしか仕方ないんじゃないかなと思います。

それと，山田さんからも出ていました，弁天の海洋センターですね，この間，私もね北洋資料館のことを言ったものですから，そのことどうなのかなと，見に行つて来ました。あれは北大水産学部だとか，学術的なことをやっていますよね，水槽を設置して魚がどうだとか，ふ化するのにどうだとかというようなことをやっていましたね。建物は立派ですけども，ちょっと博物館的なものとはマッチしないなという感じですね。ですから，あそこはあそこでちょっとよく分からないですけども，それと統合というようなことはちょっと難しいのではないかなと思います。以上です。

【川嶋座長】

はい，ありがとうございます。

今のところ，多分，統合が絶対無理という感じ，条件付きになりそうなものは文学館ですね，文学館については啄木資料の問題をどうするかというようなところはまだ残っているかと思つています。

北洋資料館については，今のところ，統合でもいいのではないかとというような意見になりつつあるように思つていますが，そうではないという方がいらっしゃれば意見をいただけると，ありがたいのですが。

それから、ちょっと確認ですけれども、北方民族資料館については、資料保全とか災害の点から統合は必要だという考え方でよろしいですか。

後は、若山委員の方から出ていました郷土資料館ですけれども、郷土資料館については、建物自体が歴史的な価値が非常に高いということで、その点をどうするかということがあるのですが、もう1度ご意見をいただけるとありがたいです。統合とかいう観点から。

【若山委員】

中の展示物は移せるとは思います。建物は、いわゆる昔の巨塔、まさに資料館として残すことは可能だと思います。今1階2階に積み上がっている物全部、見せなきゃならないのか、人をつけなきゃならないのかということ、これは検討して、はっきり言ってITの時代ですから、行って出かけて行って、ぐるっと回るだけでも価値があると思います。ああいう展示の仕方をしなくても。本当のあそこにあるもので、移せるものというのは、7割くらい移せるのではないかと。あそこは、かつて渡辺熊四郎が実際にやった、焼け残っている建物だから、その価値はあるということですから、という意見なんですけれども。

【田原委員】

郷土資料館の建物自体は、北海道の指定を受けている。基本的には中の展示物というのは、一部のものを除いてほとんど確か博物館の本館から一部移動させて、基本的にはあそこでないと展示できないものではないし、あれはむしろ街並みの中でも情報センターというか、そういう扱いでもいいのではないかと。極端に言って、博物館と切り離してもいいのではないかと私は思います。その方が使いやすいのではないかと。資料の問題というのはほとんど問題ない。統合館というか、どこに持っていても扱えるものですから、そういう考え方もできると思う。旧イギリス領事館と割と同じという考え方もできると思います。あれも実際の展示物はあそこでなければならぬということはないはずですから。そういう切り口でやっていった方がすごくすんなりいくのではないかと。ちょっと乱暴のように見えますけれども、統合というよりも、博物館としての機能の廃止ですよ。そして、その方がすっきりするのではないかと私は思います。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。

そうしますと、今のところ議論の中に出てきているのは、統合という点での可能性が高いものが多い訳だけでも、恐らく文学館の機能については、いろいろな調整が必要だと思いますが、こちらについては、何か意見お持ちの方いらっしゃいますか。

根本先生は基本的に統合した方がいいだろうと言っていましたけど、ただ、資料管理の点から言うと、渡邊委員の仰ることも非常に最もなことだと思いますし、仮に統合するとしたら、例えば啄木館というのは、展示についてはどうするかというのは別途考えるというようなことになるかもしれないので、そこは要検討だと思いますが。

いかがですか、そろそろ意見を……。はい、小山委員お願いします。

【小山委員】

ごめんなさい。統合について直接の話ではなくて、さっきも話をした私は、今、函館市が財産として持っている資料、それをどう考えるのかという基本の考え方を知りたいなというか、全て貴重な物だから、1つのところにきちんと保管しておくようにするというふうに考えているのか、いや、それほどでも価値的にならないという物については、破棄したりなんかするというふうにして、整理するというふうに考えているのか。根本先生のお話のように、展示室から脱却をするという意味で、全部の資料を展示するのではないとなった時に、今ある資料というのはどういう扱いになるのかというのが、すごく気になる。

【川嶋座長】

これについては、市の方で説明をいただけるでしょうか。

【熊谷博物館長】

はい。博物館長の熊谷です。資料の取り扱いについての考え方でございますが、使わなくなったから廃棄をするというような考え方はありません。基本的にはやはり全ての資料は財産として保管をしながら、それを展示、活用していく方法を模索・検討していくのが、博物館の業務だと思っています。

資料は、当然、あそこにはこれからの議論になるかもしれませんが、できる限りよい環境、どうしてもやはり物理的に朽ちていく物が出てくるというのが現状としてはございますが、そういうことがないよう保管して、今後の郷土の歴史を伝えるため、何とか市民の皆様の展示に供するという事に使用していくというのが、基本的な考え方でございます。

【川嶋座長】

よろしいですか。

【小山委員】

はい。

【川嶋座長】

時間が結構経ってしまって、前半で言っていたのですが、もう大体3分の2くらい時間を使ってしまったので、そろそろ意見を集約したいと思うのですが、今までのお話を伺いますと、基本的に5館のうち、そのままの形で残る所というのはなくて、総合ミュージアムの方に移管、ただし、文学館機能については、収蔵物の状況を見て総合ミュージアムの検討の中に盛り込んでいくというようなことかと思えます。ですから、全部が文学館の現状やっていることを、そのまま総合ミュージアムに持っていくのではなくて、例えば中央図書館の機能と、どこを分担するかということを考えながらいくというようなことかと思うのですが、このような結論で皆様の合意が取れたということでよろしいでしょうか。

(「はい。」との声)

よろしいですか。

では、そのようなコンセンサスが得られたということで、具体的になるところに入っていきたいと思います。ありがとうございます。

次に、行うべきことが、この（仮称）総合ミュージアムの整備にあたっての基本的な考え方（たたき台）というところに関しての意見なんですけども、これ、中を読んでみると、多分、作られた時と現在の環境が少し変わってしまっているですとか、それから今後のことを考えていくと、これらの項目については表現が違う方がいいのではないかということがあると思うのですが、こちらの方についての意見を取りまとめる方向に行きたいと思います。

それから、ちょっと忘れておりましたけども、基本的な統合の方向の話というのについては、まとめたとおりなのですが、それよりも優先して資料の収蔵については、十分、早い時期に対応していくということを付け加えるというのは、この検討会議の結論としてよろしいでしょうか。

総合ミュージアムの設立を待つということではなくて、収蔵環境の整備は、優先して行う必要があるという内容で、これをこの会議の意見としたいと思います。

それでは、この青い資料ですけども、こちらの方ですね、総合ミュージアムの整備にあたっての基本的な考え方（たたき台）というものですけども、こちらをちょっと数分間見ていただいて、ざっと見直していただくと、いろいろ現状では修正が必要なところが出てくると思います。それらについてご意見をいただきたいと思います。

ちょっと、数分、時間取りますので、読んでいただけるとありがたいです。

ここにご参加の方は、今までの議論を聞いていますと、函館の博物館の環境の改善が必要だというふうに考えられている方が多数だと思いますけども、そういう中で、この検討会議の中で、強い意志なのかどうかということについては重要ですので、積極的にこのたたき台について、この考え方をですね、盛り立てていくような意見をいただけるとありがたいと思います。

読んでいくと、多分これ、作られた時点から時間が経っているので、いくらかやっばり気になるところがあるんですよね。文章の表現とか書かれている項目に。そのあたりについての意見をいただきたいというふうに思います。

あるいは、現時点で欠けていることですね、それらをここに付け加えておくことは必要だと思います。

私、気付いた点で言いますと、例えば現状であれば、SDGsに関わることを、やはり総合ミュージアムの項目の1つとして挙げておくことは必須だと思います。北洋資料館ですとか、そういう海洋関係に関わることを扱っている博物館であれば、そういうようなことが前面に出てくる必要がありますし、あるいは国際都市というのであれば、国際都市に関わるものが、非常にポジティブに書かれている必要があるのだらうと思いますけど、そういうことでこのたたき台を強化するうえで必要なことを皆さんから出していただければというふうに思います。

じゃあ、皆さん読んでいる間に、私が気付いたことを言いましょうか。

2番のところ、「人にも資料にも優しいミュージアム」となっています。3のミュージアムのコンセプトのところですが、「人にも資料にも優しいミュージアム」になっていすけども、これはちょっと書き方としてはあまりよくないだろうと思います。これは人に優しいミュージアムのことと、それから資料管理の適切さというふうに分けて扱うべきで、人に優しいと書いてある部分は、④の「すべての市民や観光客が」というところと重複していますので、このへんで強化していく方がいいだろうと思いますし、必要であれば、その部分、バリアフリーの部分は独立させてもいいかと思いました。

ですから、資料管理というのは、非常に議論の中で大きな問題点でしたので、それは1つの項目として挙げたうえでですね、人に優しいというふうを考えている部分については、明確にバリアフリーだとか、ユニバーサルデザインとかというふうなそういう書き方で、ちゃんとこう訴えることができるようにした方がいいというふうに思いました。

他にないですか。はい、根本委員、お願いします。

【根本委員】

僕もこれ、読ませてもらって、作成した人の意図というのはもちろんある訳ですけども、何となく現在の博物館をよくしたいというのが、全体的なオーラというか。でも、やはり、今の函館の博物館よりもより良い博物館に変わっていくという時代背景を考えた時に、ちょっとやっぱりいくつか足りない部分があるのではないかな。

それは1つ感じたのは、全体的に博物館、つまりもっと言うと、行政からのサービス提供から脱していない、つまり言葉は悪いですけども、見せてあげますよ、教育普及しますよ、ですから1つもっと具体的に言うと、ユニバーサルデザインというのは、今、普通ですよ、この間の会議でも言いましたけど、これは当たり前だと。でも、これからのユニバーサルデザインは障がい者の人達が博物館の中に関わってくるといことなんですよ。サービスでユニバーサルデザインを作るのではなくて、いろんなその博物館に行けない人の自宅からでも何かのアクセスをして、自分が役立つ、そういうデザイン、そういうのが今の時代と思う。

ですから、行政が作るというか、そういう意識が強いので、だから当然、2番目に関係しますが、市民協働が文面化されていない。前も話したと思いますけど、平塚の博物館は19の市民団体があって、一緒に博物館経営をしている訳ですよ。これからの博物館って、行政の人達だけで博物館経営って僕はできないと思う。難しい。そういうところが、ちょっと気になるのと、もう1つ、どうもうちは、函館の博物館は、地域の博物館なんですね。地域の博物館としての捉え方がほとんどない。どういう位置付けにするのか、つまり、函館の博物館だから、函館だけを対象にするのか、それとも道南を対象にするのかとか、そういう領域論にほとんど触れていないので、やはり函館の博物館って自分達の行政範囲だけをリカバーすればいいのかなという、歴史を捉えた時もすごく難しい訳ですよ、そういう捉え方が。簡単に言うと三湊の時代があった、江差とか松前とかいろんなところ関係してくる。そういうことも、ほとんど触れられていないので、このたたき台としてはそれが目的ではなかったと言えればそれまでなので、何とも言

えないですけども、せっかくこういう多くの方で議論する時に、そういうところも踏まえて、意見を聞いた方がいいのではないかなというふうに思っています。

【川嶋座長】

私も、根本先生と同じく、この中で人、市民との関わり方に関することが非常に弱い。それから、地域が、これ函館の歴史っていうふうにしただけでなくて、でも実際の収蔵物はほぼ道南、道南全域が関わっているのに、せまく捉えると、それはちょっと残念な捉え方だなというふうに思いますので・・・。

【根本委員】

言うのを忘れていましたけど、総合ミュージアムなんですけども、やっぱり歴史文化で、先ほど僕、学際的にと言いましたけど、では1つの例として函館山を捉えた時に、函館山の自然というのがありますけど、それと要塞がありますよね、今インダストリアルネイチャーという捉え方、世界でしている訳ですね、本当の自然のネイチャーとインダストリアルネイチャーってどういう関係性にあるかとかいろんな捉え方をこれからしなくてはいけません。社会的な問題でもある。そうした時に自然と人文社会とか、そういうものとの関係を捉えなくちゃいけないのに、この中はやっぱり自然に対する意識というもの、ちょっと希薄だなというところもすごく感じたところです。

【川嶋座長】

今、市民との関わりという点での話だったんですけども、ここに書かれているコンセプトについて、学校関係者の方に教育上の観点から見た時に、こういうことを取り上げてほしいとか、この表現はちょっとなじまないとか、というようなところはないかというところで、田上委員、いかがでしょう。

【田上委員】

中学校の田上です。読ませていただいて、今、皆さんから聞いて、なるほどと思わされるが多々あって、単純に読んだところで、例えば2番の総合ミュージアムの整備にあたって配慮しなければならない事項の5つを読むと、まさにこの5つだと思ってしまう。

ですから、ちょっと個人的に深読みが出来ていないなと思います。学校現場については、本当に歴史、あるいは函館に限らず道南とかという声、先ほど聞いてなるほどと思うところがあるので、むしろ皆さんの声からですね、自分の見聞を拓けながら改めて読み直させていただきたいなど、本当に今、浅い回答しかできなくて申し訳ないですけど、正直なところ、そんなところです。

【川嶋座長】

例えばですね、4番のところの、具体的な黒四角の4番目のところに「総合学習や修学旅行に豊かな学びや体験の場を提供できるミュージアム」と書いてありますが、現代的な教育の場から見た時に、この表現で、もうちょっとこうよくするというようなことはないでしょうか。

【田上委員】

今、豊かな学び、「体験」というところが入っていましたので、むしろいいなと思っていました。

そして、ARやVRというのも入っていて、今の子ども達に関心を持たせるようなイメージ、ここで広がっていくところではあります。総合的な学習、非常に大きな探求学習の、9教科に限らないですね、大きな学びになっていますので、それに入っているということで、修学旅行というところ、などと言いますか、修学旅行に限らず、本当に1日でも学べたりもしますので、日常的にも、例えばですけど、部活動が週1回だけになります。地域移行になると、子ども達が自由に、自分で過ごす時間が増えてきますので、そのあたりを意識化させるという、ちょっと表現難しいですけども、ニュアンスとしては概ねこれで個人的には納得するんですけど、そんなイメージを持ちながら進めていければと思っていました。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございました。

坂野委員、いかがでしょうか。

【坂野委員】

工業高校の坂野です。今、④番の四角の4つ目のところの総合的なうんぬんというところで、私も体験という言葉が入っているのは大事なのかなと思って、読んでいました。それで、高校生が修学旅行行ったりすると、沖縄や広島なんか平和学習という、そういうような形で行くと、向こうの語り部さんのお話を聞いたり、そういうところ、話を聞いてから展示を見ると、そういうようなことを考えた時に、函館に来る修学旅行生にそういうような函館の歴史を説明した後に、そういうミュージアムの中を見てもらうというふうな流れが作れたらいいのかなと、そんなように感じていました。

それから体験ということと言うと、今、まさにそこ、世の中いろんなところただ行って見るだけではなくて、そこに行っているいろんなことを実際体験するということが非常に多く、どこの地域でもそういうことを多くやっているのかなと考えた時に、このミュージアムの中でも、何かしらそういうことが定期的に、いつも同じことではなくて、何かそういうことが、何か手を動かすとか、そういうことができるようなところも入っていると、さらにいろいろ人が多く利用していただけるのかなということを感じていました。以上です。

【川嶋座長】

確かにそういうことを、具体的な表現として、この中にいくらか盛り込むことができるとイメージが膨らみますね。

あの、多分、保護者の立場というになるかと思いますが、PTA連合会の駒野委員から一言。

【駒野委員】

はい。函館市PTA連合会の駒野と申します。私もたたき台に対してのところという範囲では、特に意見するというか、特にここがこうした方がいいんじゃないかということはないですけど、一保護者としての意見として申し上げさせていただくと、やはり

その今回、私この会議に参加することになって、初めていろんな所を改めて、昔、子ども頃ちょっと見たことはあったにしてもですね、大人になって改めて見た時に、やはりこれは子ども達と一緒にまた見直すというところですね、やはり会議で統合するという方向に進みそうなので、その点に関してはすごくいいなというところと、あと、各地区からお客さんが来た時に、函館を見せて回る時に、今の函館だと行くところが限られてて、やはりその、それが総合ミュージアムという形になると、また函館の歴史ということを説明しやすいのかなというところなのですが、たたき台に対しては特に意見はないですけども、今後も、この会議にまた参加してこう・・・。

【川嶋座長】

はい、多分、直接の文言ではなくてもですね、意見の趣旨を反映して、たたき台の中に反映していくということもできるかもしれませんので、このへんはご検討いただきたいと思います。

【駒野委員】

はい。ありがとうございます。

【小山委員】

はい。

【川嶋座長】

小山委員、お願いいたします。

【小山委員】

今の④のところの総合学習とか修学旅行の部分なんですけれども、子ども達はもとより、市民でも観光客でも学びを提供していただくだけではなくて、本当に自ら学びを深める場という、それが前にも少しお話しましたけども、大学だったり、高等機関とこの博物館との連携みたいな、そのことによって、刺激を受けながら自分で学びを深める、ここが学びの起点という、そういう言葉があるのかどうか分からないですけども、そういう場となるという方が、これからの博物館としてはふさわしいのではないかなと思いました。

【川嶋座長】

先ほど、根本委員からもお話がありましたけども、一方的にこう展示を見るというよりは、参加しながら、むしろその博物館の世界を作り上げていくというような、そういうようなところができるといいなというふうに思います。

【村上委員】

いいでしょうか。

【川嶋座長】

はい、村上委員、お願いします。

【村上委員】

小山さんとほぼ同じなんですけど、どこで言おうかと思って、言い淀んでいたのですが、例えばこのたたき台の2番に、総合ミュージアムの整備にあたって配慮しなければならない事項というのがあって、歴史や文化を総合的に学べると、その歴史文化の後に、

中黒で自然を入れてほしいな、というのが自然学者の思いというか、根本さんに言っていたとおりなんですけど、で、市民が何度も足を運びたいくなるという形で、そこはそうなのかなというふうに思ったんですけど、僕はこの話を熊谷館長からいただいた時には、一番大事なポイントというのは、やっぱり人を育てる機能というのが、ものすごく博物館にはあると思っていて、特に小さい子達というのは、将来を担っている子達で、その子達がいつか函館を出て行ってしまっ、帰って来ないみたいというようなことが多分続いているので、負のスパイラルみたいな形になって、人口減少が続いているということだと思うんですね。で、それを反転させるということは、なかなかそんな簡単にはできないことだと思うんですけど、こういう施設で学んだ子達が、やっぱり函館に戻って来たいんだと思えるような、そういう施設に、例えばストラクショナルに予算の問題とか、観光振興とかいろんな視点があると思うんですけど、そこが一番大事かなというふうに思います。大学の中でも、学生と接していると、いろんな学生がもちろんいるんですけども、多くの学生がたまたま大学で函館に来て、地元に戻って行ったり、そのほかにも残ったりとか、いろんな子がいるんですけど、中には函館にいて、函館に残りたいという子がいるんですよ。そういう気持ちが湧いてくるような、今、大学生の話ですけど、小・中学生にも湧いてくるようなそんな施設になっていったらいいなと思っているので、どこかの文言に何かこう、人を育てられるとか何か、そういう文言がどこかにあったらいいのになと思っていました。

【川嶋座長】

人を育てて、地域に対して愛着を持てるような、そういうところですね。

はい、ありがとうございます。

林原委員、いかがでしょうか。

【林原委員】

はい。私も今、発言あった内容を考えていまして、私も函館出身なのですが、Uターン組です。何で函館に戻ってきたかというと、やっぱり函館の魅力というものを小さい頃から感じていて、もちろん仕事上で誘いを受けて、戻ってこないかということで帰ってきたというそういうきっかけもあるんですけど、いろんな要素を考えても、実は函館に戻ってくる前に横浜にいたんですけど、それを上回る函館の魅力を僕自身は感じていて、それで戻ってきたと。それは、やはり一言で言うと郷土愛のようなものが、どこかで自分の中にあっただろうなと。私、仕事の方は私学、私立の学校関係なんですけど、今、学生が非常に少なくでですね、大変困っている。で、函館市も人口が減って非常に困っていると。簡単なことではないですけど、やはり今いる子ども達が、一旦は出ていくかもしれないけども、将来的に戻ってくる、そういうきっかけになるような、もちろん学校出て、そのまま函館に残るという選択肢ももちろんありますけども、最終的に戻ってくる、あるいは戻って来なくても函館を応援するような、そういう人材を育てるような博物館になればいいなというふうに思います。

【川嶋座長】

ありがとうございます。そういう人を育てて、地域に対する愛着を育てていけるようなことができるかと非常にいいなというふうに思います。

時間がないんですが、黒島委員、いかがでしょうか。

【黒島委員】

はい。これを読んでて気になる点というのは見つけれなかったですけども、今の話題、議題で、若い世代が函館に帰ってくるというUターンの思考というか、Uターンするのは大事だみたいな話だったんですけど、僕もUターン組なので、深くそれは賛同しています。ただ、他の地域と違って、函館に戻ってきたい理由というのを今ずっと考えていたんですけど、明確にこの理由があるから函館に戻ってきたというのが、ちょっと思い浮かばなくてですね、住みよい、函館が心地いいなと思って戻ってきて、やっぱり心地いいなという感じなので、深くそこが説明できなくてちょっと残念なんですけど、僕もそこらへん考えていこうかなと・・・、すみません。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます。

はい、どうぞ。

【小山委員】

今、2のところの2つ目、市民が何度でも足を運びたくなるミュージアムにするという、これはこれでいいんですけども、やっぱりあの、発見がある、新たな発見がある、そういうことが何度でも足を運びたくなるという意味かなというふうに思います。

ただの付け加えですけども。

【川嶋座長】

谷口委員、お願いします。

【谷口委員】

2つありまして、いずれにしても統合施設をですね、造るにしても、建設するとしても行政が造るのか、また民間の力も借りて造るのか、いろいろ考え方はあると思いますけど、いずれにしても運営していくにあたっては、先ほどご意見もありましたけど、行政だけではなくて、市民、基本的には市民もそうだし、関係団体みんなで支えていくんだという視点をきちっと書いておいた方がいいのかなと。将来世代には過度な負担は残さないということのためにも、みんなで運営していくんだよという理念があっただけいいのかなというのが1点と、それから当然、施設できて来てもらうことが大事ですけど、我々コロナを経験して、いろいろな生活も経済活動も一変しました。いろんなことを考え直すことになって、例えば博物館に来てもらって、実際に見てもらって学んでもらうのもいいんですけど、そこに至るまでの過程で、いろんな資料にアプローチできるというか、例えば学芸員にも外からというか、来なくてもまずアプローチできるような仕掛けもあって、そしてそのようなことがあって、じゃあ函館に行ってみようか、そういう誘う仕組みとか、ちょっと抽象的になりましたけども、そういう考え方というか、そういう観点はあってもいいのかなと思いました。以上です。

【川嶋座長】

はい、ありがとうございます

ちょっと時間が過ぎてしまいましたので、まだ多分読んでいると、気が付くことがあるかと思うんですけど、事務局の方で、どうでしょうね、これ。まだ、読んで気が付いたことがあった時に、次回よりも前でも連絡した方がいい？

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

はい。基本的にはこの議論の場で集約しておくものなのかなと思っておりますので、次回、第3回にまた継続協議という形で・・・。

【川嶋座長】

第3回の冒頭でという。

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

はい。引き続き協議して、委員の皆様のコンセンサスを図ったうえでのとりまとめということで進めていただければと思います。

【川嶋座長】

ちょっと2点、僕、仕事柄いろいろ気が付くことがあるんですけども、1番は項目3、ミュージアムのコンセプトの1番は、これはなくていいと思います。これはコンセプトではなくて、もう造るということ自体が、そうであるので、これは1番は不要で、2番以降で議論していけばいいというふうに思いました。後は、②のところはですね、なんか同じような用語が繰り返し出てきているので、このへんは整理しておいた方が見やすくなるので、そのへんはちょっと文言の話ですけども、そこは確認していただいた方がいいと思います。

さて、それでは次回は、日程がもう多分決まっているのではないかと思いますけども、次回の冒頭のところで、ここに盛り込むべきことについて、皆様のご意見をいただいて、それを可能な限り影響を受けたたたき台、たたき台といいますか、基本的な考え方を作っていただく方向で、話は進んでいくと。ただ、ここに書かれているのは、どちらかと言うと、概念的なことが多いので、それとは別にですね、具体的にミュージアムでこういう点には配慮してほしいということで、たたき台と言いますか、基本的な考え方には載せないけれども、具体的にこういうことは十分に検討してほしいというようなことを付加していきたいと思います。これは議論の中でたくさん出てきておりますので、それらについては、次回以降でまとめて、たたき台に対する意見とは別に、総合ミュージアムに対する期待する内容というのを、この会議の中で整理していきたいと思いますので、ご協力よろしくお願いします。

ということで、今日の議事は全部終わったかと思っておりますので、事務局にお返しします。

4 その他

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

はい。ありがとうございました。

これにて本日の議題については、全て終了いたしました。

今回も、特に回を重ねるごとに貴重なご意見がどんどん委員の皆様から出てきて、非常に今までの行政の進め方とは違った視点で、あくまで皆様、市民のコンセンサスを図るという手法で、初めてこういったやり方をさせていただいているのかなというふうに思っております。

結果、このたたき台の中に基づいて、多様な意見、いろんなそれぞれ分野で多様な意見を頂戴することができましたので、非常に貴重な財産を今日は頂戴できたのかなというふうに思っております。ですので、引き続き委員の皆様におかれましては、市民コンセンサスが図られた検討会議の意見としてのとりまとめとするため、引き続きご協力をいただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

次回についてでございます。

どんどん意見がまとまってきたので、そろそろ時間を空けずに皆様の認識・温度が高いうちにしっかりと意見を受け止めていきたいなということから、今後3回の会議を予定してございます。

次回の予定といたしましては、第3回につきましては、直近となりますけれども、8月の19日、18時30分より、市役所の裏手にございます函館市勤労者総合福祉センター、サン・リフレの2階大会議室の開催で調整させていただければと考えておりますけれども、現時点で8月19日、出席が厳しいと予測されている方、いらっしゃいますでしょうか。あ、駒野委員ですね。

一応、この日程で調整をさせていただき、また整いましたら、早急にご連絡の方をさせていただきたいと思っております。

続いて、第4回の会議の予定日を予めお知らせさせていただきます。予定でございます。第4回は、9月5日木曜日、第5回は9月24日火曜日、両日とも18時30分より本日の会場でございますこの企業局4階大会議室の開催を予定してございます。

この議論、今後3回予定してございますけれども、議論が整って早く意見まとまったということであれば、5回に至らない場面もありますけれども、皆さんの意見頂戴しながら、進めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

こちらの方の日程につきましても、原則変更等の生じない調整を目指しておりますけれども、会場諸々の事情によって、また変更が生じる場合もありますので、ご承知おき願いたいと思っております。ここまでで、皆様より何かご質問等ございますでしょうか。

【中村委員】

すみません。ちょっとお話早くて。8月19日、9月5日、もう1つは？

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

9月24日です。ちょっと私も焦ってしまいました。すみません。

両日ともこちらで、同じく18時30分からということですのでよろしくお願いいたします。失礼いたしました。

他に何かご質問ある方、いらっしゃいませんか。

【中村委員】

5日もここですか？

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

9月5日と24日はここです。18時30分からです。

次の第3回だけ、8月19日月曜日だけ、サン・リフレ函館になります。よろしくお願いたします。

日程以外にも何かご心配事、こんな話を聞いたけど、心配していますとか、いろいろなこういう議論が進んで、いろんな話が出ていますけども、その中でもご心配なことがありましたら、いつでもご連絡いただければ対応させていただきますので、何なりとご相談ください。

他になれば最後に、川嶋座長より一言頂戴できますでしょうか。

【川嶋座長】

今日も、皆さんにたくさんご意見をいただいて、非常に感謝しております。この会議はですね、市民の意見、たたき台に対する意見のコンセンサスを図ることが目的ですので、少し議論をたくさんいただいて、その中でお互いを理解していくということが必要なことだったんですけども、それがある程度達成できているのかなという印象を持っておりまして、これは皆さんのおかげだと思いますので、非常にありがたく思います。

次回以降、できるだけスムーズに議事が図れるように努力したいと思いますので、今後もよろしくお願いたします。

5 閉 会

【加藤歴史文化資源保存活用担当課長】

はい、川嶋座長、ありがとうございました
委員の皆様も大変お疲れ様でございました。
本当にありがとうございました。
以上で本日の検討会議を終了いたします。
本日は誠にありがとうございました。